



Weekly Market Report

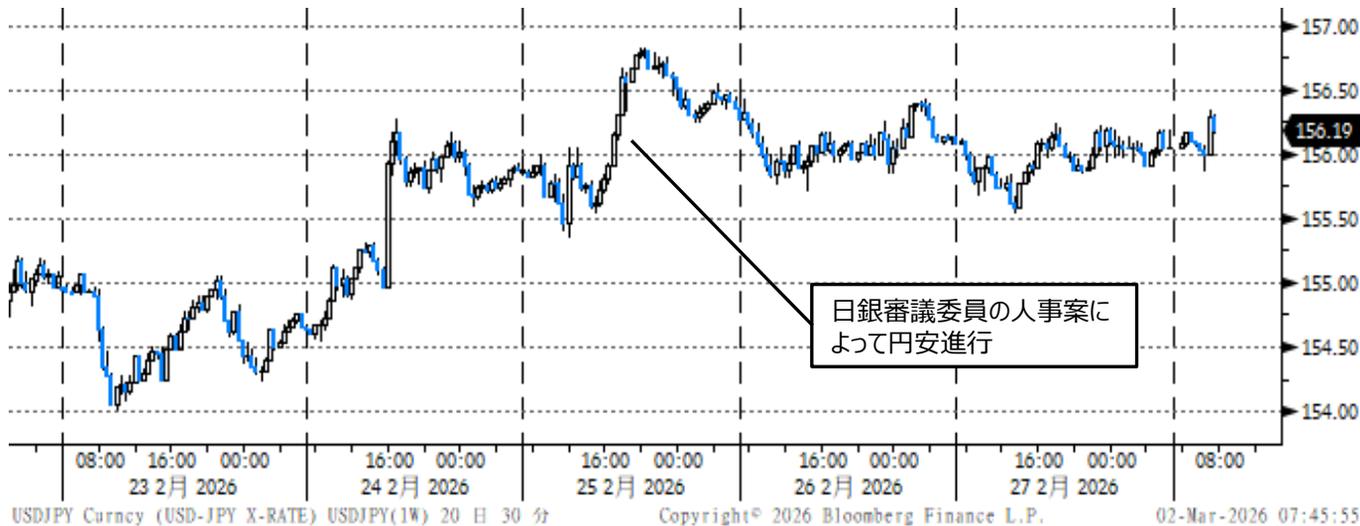
Mar 2, 2026

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

先週は日銀人事による国内金利上昇を伴い円安進行。今週は方向感を探る展開か。

USD/JPY (1週間の値動き)



コメント

(出所) Bloomberg

先週のドル円相場は、154円台前半から156円台後半へ円安進行する展開となった。週初は東京市場が休日となる中、NY市場では米連邦最高裁がトランプ米政権の相互関税を違憲と判断したことを受け、トランプ氏がすべての国の輸入品に150日間限定で10%の新たな関税を課すと表明したことで、米関税政策を巡る不透明感から円買いが優勢となり、ドル円は154円台後半で推移。週中は日銀の審議委員に金融緩和と財政出動に積極的なリフレ派と見られている中央大学の浅田統一郎名誉教授と青山学院大学の佐藤綾野法学部教授が人事案としてあげられたことで、ドル円は一時156円台後半まで円安進行。週末にかけては米長期金利の低下により円買いドル売りが優勢となり、156円ちょうど近辺で越週した。今週は、日銀植田総裁と氷見野副総裁の講演が予定されている。発言内容から利上げに関する日銀の姿勢や、日銀人事を通じた高市政権の金融政策に対する姿勢を見極めながら方向感を探る展開と予想する。海外は、週末に米雇用統計が控えているが、引き続きトランプ大統領の不規則発言とイランをめぐる地政学リスクによる乱高下に注意したい。(市場営業部/飯野)

今週の経済指標 (予定)

USD/JPY (5年間)

日付	イベント	予想
3/2(月)	(日本) 日銀氷見野副総裁挨拶	-
3/2(月)	(米国) 2月ISM製造業景気指数	51.9
3/3(火)	(日本) 日銀植田総裁挨拶	-
3/4(水)	(米国) 2月ISM非製造業景気指数	53.9
3/5(金)	(米国) 2月雇用統計	-



(出所) Bloomberg

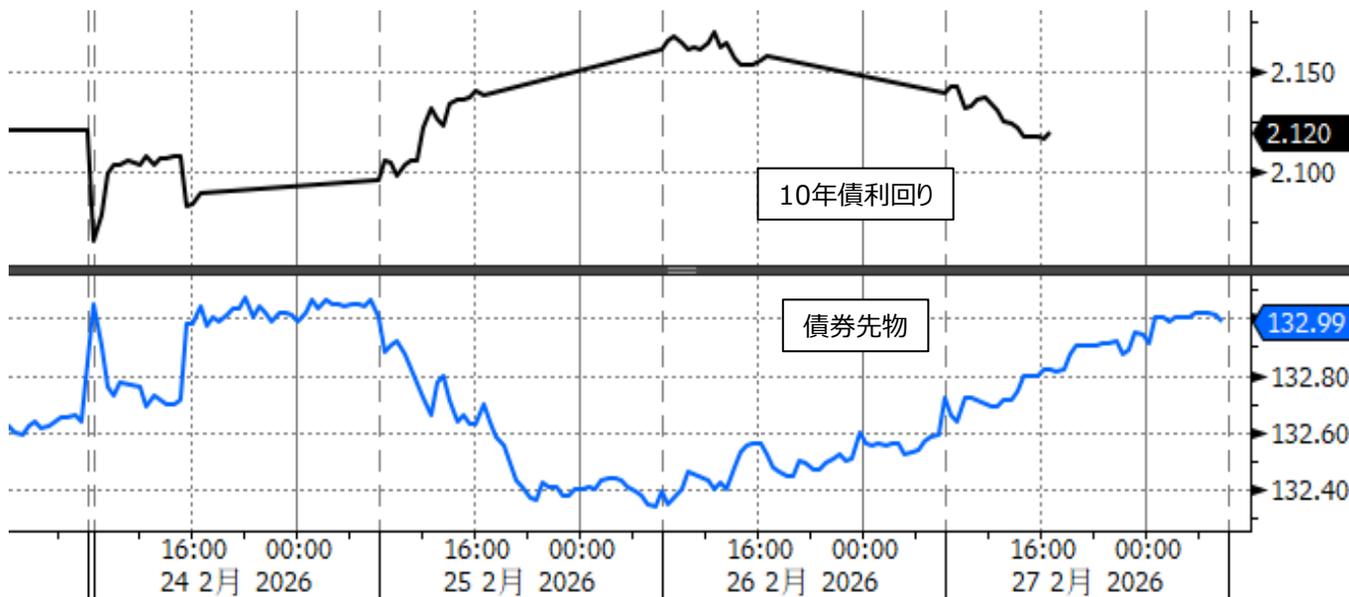
今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
下出康平	155.50 – 158.50	2月米雇用統計に注目。FRB内にて利下げ見通しに温度差がある中、労働市場の底堅さが示されれば、一段の円安か。
鈴木万里子	155.00 – 158.90	原油価格高騰によるインフレ懸念再燃、円売り圧力強まるものの介入警戒感から神経質な動きとなるか。

2. 円金利相場概況

日銀審議委員選任で、長期金利は上昇。今週は中東情勢と長期・超長期債入札に注意。

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



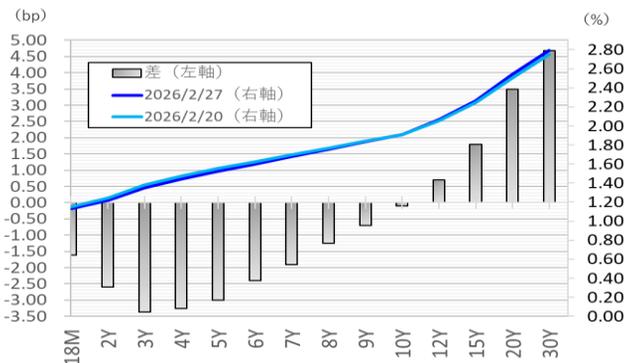
GJGB10 Index (日本国債10年) JGB.F 30 日 30 分 Copyright© 2026 Bloomberg Finance L.P. 02-Mar-2026 07:47:32 (出所) Bloomberg

コメント

先週の10年国債利回りは上下に値幅の出る粗い値動きで推移し、週間としては小幅低下となった。3連休明けの24日には、米関税政策の不確実性から米金利が低下した流れを受け、10年国債利回りは2.05%程度まで低下してスタート。25日には次期日銀審議委員を、リフレ派の浅田氏と佐藤氏とする人事案が国会に提出されたことで、財政懸念が再び高まり、週央にかけての10年国債利回りは、2.15%超まで上昇。週末にかけては、2月の東京都都区消費者物価指数（CPI）の上昇率が鈍化したことで、日銀の早期利上げ観測が後退し、金利は低下傾向へ転じ、10年国債利回りは2.12%で越週となった。

今週は、海外は先週末の米国のイラン攻撃のヘッドラインを見極める展開。週末には米雇用統計も予定される。国内では週前半に氷見野副総裁と植田総裁の講演が行われる。金利の上昇圧力がかかる展開が予測される。引き続き荒れた相場の中で、3日の10年債と、5日の30年債の入札も行われることから、超長期債の金利変動を警戒していきたい。（市場営業部/鈴木）

金利スワップ変化（1週間）



10年円金利スワップ推移（5年間）



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
伊豆浦有里恵	2.00% - 2.20%	中東緊迫化でリスクオフが先行する一方、米雇用統計前の様子見姿勢と国内補正予算に伴う財政懸念が交錯し不透明な局面へ。
飯野りさ子	2.00% - 2.20%	日銀植田総裁と氷見野副総裁の発言から次回利上げ時期を探る展開。中東情勢が悪化すれば金利が大幅に低下する可能性も。

3. 今週のトピックス

英ポンド相場動向

BOEの利下げは当面継続。英国政治に対する不透明感もあり、英ポンド相場は上値の重い展開か。

<英国経済の状況>

英国の2月購買担当者景気指数（PMI）は総合が53.9と好不況の分かれ目となる50を上回り、前月の53.7から改善する結果となった【図表1】。サービス業が53.9（前回54.0）にやや低下したものの、製造業は52.0（前回51.8）に改善しており、英国景気は緩やかな回復基調にあることが示されている。英国の2025年実質GDP成長率も+1.3%と2024年の+1.1%から改善している状況だ。

ただし、雇用面では10-12月期の失業率が5.2%と2021年以来的の水準まで悪化していることに加え、インフレについても1月の総合CPIが前年比+3.0%、コア指数は+3.1%と緩やかな低下基調となっているため、景気への懸念からイングランド銀行（BOE）が予測する2026年の成長率は+0.9%と減速が見込まれている。

<イングランド銀行の金融政策>

イングランド銀行（BOE）は、2月の金融政策会合で政策金利を3.75%に据え置いた。ただし、金利引き下げを主張した委員が4名と予想以上に多かったほか、ベイリー総裁が「今年は政策金利をさらに引き下げる余地がある」と発言したこともあり、市場では年内に2回程度の追加利下げが見込まれている。

また、BOEの経済見通しでは、インフレ予想が下方修正された一方で失業率見通しを上昇させていることから、景気に対する弱い見方がハト的なスタンスにつながっているといえそうだ。英国金利については、BOEの利下げ期待が2年金利の押し下げ要因となっているものの、財政赤字の拡大懸念も根強いことから10年金利には上昇圧力がかかっており、イールドカーブは緩やかなスティープニング傾向となっている【図表2】。

<英ポンド相場の見通し>

英ポンドの対ドル相場については、1月に1.3868と2021年以来的の高値を付けたが、2月BOEにおけるハト的な姿勢を受けて1.34台まで反落している状況だ。

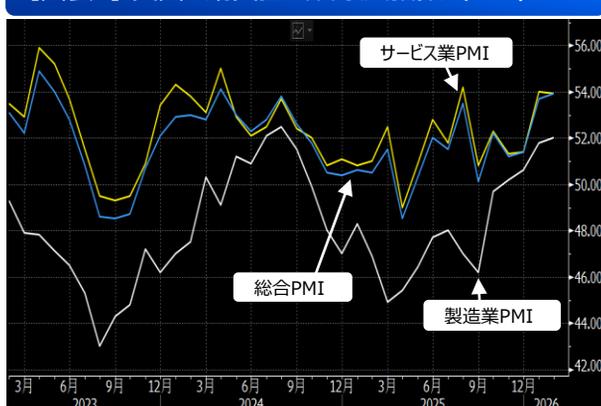
当面の英ポンド相場は、英国景気への懸念とBOEの利下げ期待から上値の重い展開が見込まれる。また、英国の労働党政権の経済財政運営に対する批判や、エプスタイン文書にからんだ任命責任からスターマー首相への辞任圧力が強まっていることも英ポンドの売り材料となってきた。

英ポンド相場のレンジは、対ドルで1.30-1.38と200日移動平均線のある1.345を中心とした展開を想定している。対円では高市首相が利上げに難色を示しているとの報道や日銀審議委員としてリフレ派の2名が指名されるなど円買い材料に乏しいことから、当面は203-215円のレンジ推移となりそうだ。

なお、シカゴIMMの投機筋ポジションは、英ポンドのネットショートが6万枚弱となっており、利下げ局面にある英ポンドは買われづらいつまみとみられる【図表3】。

（チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我 晃）

【図表1】英国の購買担当者景気指数（PMI）



（出所:Bloomberg）

【図表2】英国の政策金利と2・10年金利（%）



（出所:Bloomberg）

【図表3】英ポンドドル相場とシカゴIMMポジション



（出所:Bloomberg）

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会